

## 2019 年度秋学期研究者交流支援制度実施報告書

招聘責任者：商学部専任准教授 西 剛広

### 招聘者

氏名：ケネス・ガーゲン ((Kenneth, J. Gergen, Ph.D.)

所属・肩書：スワスモア大学名誉教授及びシニアリサーチャー

招聘期間：2019 年 10 月 17 日～ 10 月 25 日

### ケネス・ガーゲン ((Kenneth, J. Gergen, Ph.D.) 先生の紹介

1957 年にイエール大学を卒業、1962 年にデューク大学で博士号(心理学)を取得。その後、米国ペンシルバニア州のスワスモア大学において、心理学を指導。当初、伝統的な心理学の定量的アプローチ(統計学を土台とする実証研究)をしていたが、次第に定性的な方向性に傾き、実証主義に対抗する新しいパラダイムである社会構成主義(social constructionism)を確立する。

### ケネス・ガーゲン先生による特別講義について

日時：2019 年 10 月 24 日 17:10～19:10

場所：駿河台キャンパス グローバルフロント 3 階 4031 教室

司会：清宮 徹 (西南学院大学教授)

コメンテーター：Mary Gergen(社会心理学者)、高橋 正泰 (明治大学教授)

### 特別講義概要

ケネス・ガーゲン先生の講義では「『本質的で客観的な真理』は人間にとっては直接観察不可能であり、何らかの枠組みによって観察されざるを得ない」との立場にたち社会構成主義ならびに、その研究手法について概説された。

ガーゲン先生は、冒頭、科学哲学の視点から社会構成主義が成立した当時の状況を触れられた。自らが若き日の抱いた研究関心を振り返りながら、社会的構成主義に取り組み、確立された経緯を説明された。ガーゲン先生は我々が現実と思われることはすべて社会的に構成されたものであり、そこに生きる人々が言語を用いることによってとらえられると述べられた。

ガーゲン先生は実証研究における実践から独立した研究手法を批判する。研究は研究者の共同体の中で展開されたものであり、その研究が研究者共同体の外でも同じ意味をもつかについては疑問を呈している。実証主義では、特定の研究者共同体内である理論

が他の理論よりも優れていると捉える傾向にあり、データ収集や解釈がアприオリ的に行われ、研究の視点が「文化帝国主義」に陥る危険性を指摘された。

一方、社会構成主義において、社会科学とは客観的に人から独立した存在ではなくむしろ対話であると考えられる。普遍的真実ではなく、物語的な真実を尊重する。知識とは人の頭の中にあるのではなく、関係的な産物である。多くの問題は、科学的な検証によって解決されるより、社会構成主義的な世界観から、対話という実戦を通して現実化される。

ガーゲン先生によれば共同体は個々人から構成されるのではなく、個々の関係性の中で形成されるとする。このための研究方法としてオートエスノグラフィーを取り上げている。真実は個々の関係性において多様な側面があり、ともに対話することにより、これまでにない結果の創造が期待できるのである。

ガーゲン先生は、パワーポイントなどのツールを用いず、2時間の間、教壇で講義を続けられた。まさに舞台の上で演じられるように、社会構成主義について丁寧に説明された。参加者は先生の独特な「演技」に引き込まれ、魅了されているようであった。私自身も社会構成主義について学ぶことができたと同時に、先生の素晴らしい「語り」を楽しむことができた。先生の講義後も、参加者との間で活発な質疑応答・意見交換が行われ、盛況裡に特別講義が終了した。

最後に、この度の招聘では明治大学国際連携部の羽田様、前田様に変にお世話になりました。心から感謝を申し上げます。